

テーマカレッジ「大都市と地方」

「 地域合併の中でいきるまち ～まちづくりの視点から～ 」

1A042396-0 長 島 江 美

<はじめに>

私は中学を卒業するまでの15年間、宮城県の最北東端に位置する“唐桑町”というまちで暮らした。山あり海あり畑あり、さらには鉄道もなく、唯一通っている路線バスも1時間に1本というまさに「田舎」での生活ではあったが、不便だと思ったことはあるにせよ、嫌だとは思わなかった。しかし、高校に入ってから同じ宮城県の古川市での下宿生活。大学進学を強く希望していた私には、正直なところ、地元に残って大学を目指すのは難しいだろうという気持ちがあった。まちが嫌いなのではない。納得していなかった部分があった。

それでも、離れてみて改めて感じるものなのであろうか、「故郷への愛着」とは。唐桑の話に興味深く聞いてくれる高校の級友たち。遠くから励まし続けてくれる家族や友達や先生。これらすべてが故郷・唐桑の存在を私の記憶から消し去ることなく、ましてや慕う心、自慢したい気持ちを強くしていた。

大学進学を直前にして、私の中で「地方と都会の架け橋になりたい」という思いがあった。しかしそれは都会と田舎を結びつける、そこまで考えていたわけでもなく、ただ単に東京で“自分のまちをアピールできる人間になろう、それが知名度UPに繋がってくればいい”、その程度だった。それを意識して私がとった行動は二つ。「まちづくり」という活動に取り組むサークルに入ること、そして「大都市と地方」について取り上げている授業を受けること。まず、大人が進めるまちづくりに参加することで、実際に都会と地方の「繋がり」を目の当たりにすることになる。都会では、田舎の特産品や観光地がうけている・・・これだ！！そこから、この授業では只管「都会と地方の繋がり」にこだわって考えようと思った。“都会と結びついていれば発展に繋がる、まちが変わるかもしれない”ということが、あまりに単純で勝手な考えであるという認識などありもせずに。そのあまさを秋の合宿で思い知らされることになる。「唐桑は東京との繋がりを求めているのか？」このようなことにさえ、気づいていなかったのだ。自分の思いだけで突っ走ってきた証拠だった。

今までの数々の反省を踏まえてこの最終作品を製作するにあたり、空回りばかりであったが、この作品および夏季作品が自分の中で今後を考える上での第一歩になればいいと思っている。この1年間、故郷にこだわって自分が考えてきたなりにまとめるという形で、この作品を提出したいと思う。

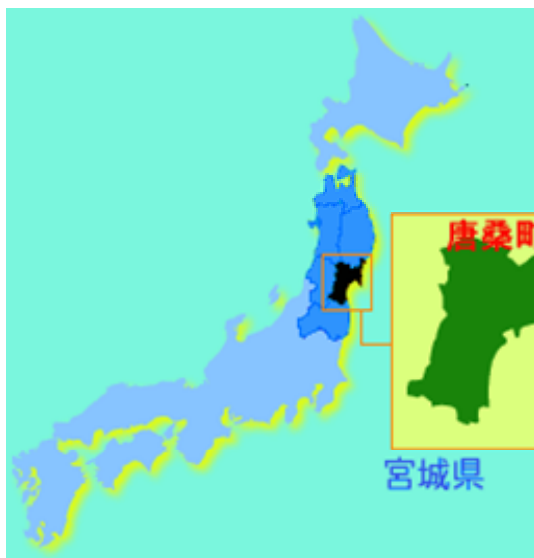
### <テーマについて>

今回取り上げている「唐桑町」は、今年10月1日に隣接する気仙沼市・本吉町と合併することが決まっている。新市名は「気仙沼市」になることも決定している。

なぜ合併するのかということは今になって議論したところで、影響を及ぼすわけでも、ましてや、決定を覆すことになるわけもない。そこでまちをみつめなおして、今考えることができるのは何であろうかと思ったとき、“合併後にそのまちがどのように存在していくか”、ということに着目してみようと思ったのである。

「宮城県の唐桑町」から「宮城県の気仙沼市の唐桑」へとまちの位置付け、人々の認識も変わるわけだ。気仙沼市のほうがはるかに知名度が高いこともあり、唐桑はその一部の付録的存在になってしまうかもしれない。存在感の強調とまちの名残を失わせないためのまちづくりの考えを聞き、また現町民にも話を伺うことことで、合併と言う転機に立ち向かうまち全体のビジョンに迫りたいと思う。

### 宮城県唐桑町の概要



<町名の由来> 昔、唐（中国）から様々な文物を満載した船団が暴風雨である浜に漂着した。積んでいた唐木の中に桑の木があり、後にこの桑が繁殖し広まったため、この地を『唐桑』と呼ぶようになったと言われている。

#### <沿革>

- 明治元年 陸前に属し、高崎藩取り締まり地となる
- 明治2年7月 桃生県に属す
- 8月 石巻県に属す
- 明治3年 登米県に属す
- 明治4年 一関県に属す
- 明治8年 磐井県に属す
- 明治9年 宮城県に編入
- 明治22年 唐桑村となる（唐桑村 + 小原木村）
- 昭和30年 唐桑町となる
- 平成17年10月 気仙沼市となる（市町合併）  
（気仙沼市 + 本吉町 + 唐桑町）

唐桑町は宮城県の最北東端に位置し、北上山系の稜線をもって気仙沼市並びに岩手県陸前高田市に隣接している。北西から南東に細長く、三方を海に臨む地形は長さ20キロメートル、周囲は約50キロメートルあり、総面積42.28平方キロメー

トル。まち全体が山がちになっていて、北から南にかけて 400 メートルをこえる山々が続く。南や東の方はのこぎりの刃のように出入りの多いリアス式海岸になっていて、山が海の近くまでせまっている。リアス式海岸特有の数多くの屈曲を描いて、複雑な入り江や豪壮な岸壁、奇怪な岩礁などその景観がすばらしく、昭和 39 年 6 月陸中海岸国立公園に編入され、加えて昭和 46 年 1 月に海中公園にも指定されている。土地利用の内訳は、おおまかに家・田・畑・森林・山と言い切れる。12 地区から成り立つこのまちには約 2000 世帯があり、道路沿いや南向きの山の麓、低くて平らな土地が広がる海岸沿いなどに家が集中している。

人口は約 8500 人で、そのうちの 28.2% が 65 歳以上のお年寄りであることから、高齢化が進んでいる状況にある。

また、自然の好漁場を擁し、三陸沖漁場をひかえ遠洋漁業先駆のまちとして著名である。同様に養殖業も盛んに行われていて、特に「牡蠣」は全国的に知れ渡っている。しかし以前は約半数存在していた第 1 次産業就業者の数が 24.7% にまで落ち込み、最も少ない数字になっている（第 1 次産業 24.7%、第 2 次産業 28.7%、第 3 次産業%）。

### 従来のもちづくりの展開

観光地としても知られる唐桑町は、「海」のまちとして自然をいかしたまちづくりを行ってきた。まず、自然を教育の舞台として活用している。小学校高学年になると授業に「ふるさと学習」が取り入れられ、カキの養殖場の筏に乗せてもらったり、早朝から船に乗り込んで網引きをする「あみおこし」の体験をしたりする。その他、観光施設が植物や鳥の観察会を主催し専門家と遊歩道を歩いて勉強会をしたり、船で海を渡って鳴り砂浜に行ったりもする。子供たちは自分たちの町の自然に触れて、そこから生き物の命の尊さを知り、環境を守っていこうという気持ちを育てているのだ。県外からも子供たちにこのような体験をさせてやりたいという声があり、筏クルーズの櫓こぎ体験などが行われている。

それから、海にちなんだイベントの実施である。毎年 11 月の第三日曜日には町民広場にて「リアスカキ祭り唐桑」が開催される。この祭りは旬の時期、唐桑特産のカキをメインにしたお祭りで、カキの消費拡大と観光客の誘致を図る目的で開催され、採れたてのカキの販売、カキ料理の試食、郷土芸能の披露及び商工祭も同時開催される等、会場は大勢の買い物客で賑わう。見て、食べて、買って楽しめるイベントである。観光客を意識して行うイベントはカキ祭りが主であるが、日常の中でも朝市ならぬ「夕市」を開催し、海産物のみならず自分の畑で作った野菜や、それを使ったアイデアパンが店頭と並ぶ。作った人の顔がわかるように写真を掲示し、安心して購入できるよう配慮がな

されている。最近では「海味（うみ）クッキーが誕生した。名前のおり、クッキーの生地にコンブ・ワカメ・カキが練りこまれた3種類のお菓子である。夕市の会場とは別に「特産品直売所」が建設されたのもつい最近のことで、町民の利用も多く、活気が出てきている。

その一方で、観光施設に関しては多少問題が残ったままである。観光を発展させるために平成6年にオープンした「漁火パーク」は大変見晴らしの良い立地で、町内初のゴーカートやリフトカーが登場し、オープン初日は町民も多く来場して賑わったが、直後のリフトカー事故からは一転、思うように観光客は来なくなった。先に述べた直売所があるのがこの土産品売り場の一部であるために足を運ぶ人はいるのだが、テーマパークとして訪れる人は年中まばらである。この状況を何とかするために観光振興協会は、2つの企画を実行している。一つ目は「唐桑に泊まって特産品をGETしようキャンペーン」である。これは唐桑町の民宿に置いてあるチラシに宿泊すればスタンプがもらえ、スタンプの押されたこのチラシを郵送して応募して特産品を当ててしまおうという企画である。しかしながら相当する金額のみが書かれ、具体的な商品が明記されていないことで、客の興味がなかなか集められていないような気がする。もうひとつは「観光施設クーポン券」である。これは観光振興協会のHPから印刷したものを提示すれば、入館料や遊覧船の料金、飲食店の飲み物の割引券として使えるという仕組みである。この問題点は、振興協会のHPが出身者の私にとっても実にマイナーなものに感じられることである。見つけづらいのである…。

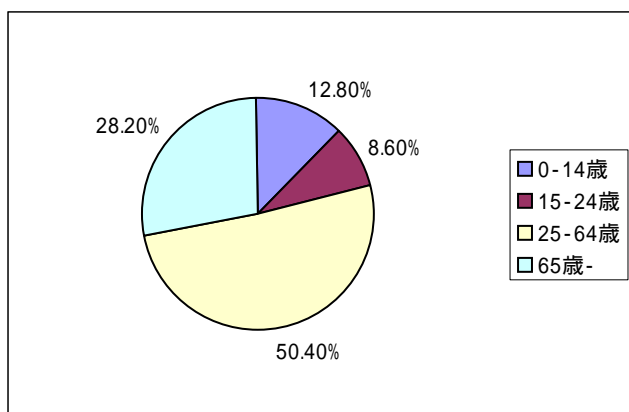


これらの取り組みについて伺ったところ、ひとつのテーマがあるという。それは、「外に向けたまちづくり」。「外に向けた」という表現はなかなかわかりづらいが、観光地としてどんどん他地域にアピールする広報活動に力を入れることを意味することはもちろん、さまざまなまちとのネットワークを意識したまちづくりをしようという意味もこめられている。しかしながら、今の段階ではそれが満足の行くような進歩を見せていないそうである。

## Q なぜ「外」を意識するのか

### 人の流入が重要

東京が栄えていると感じる要因の一つに、「人の多さ」がある。大勢人が集まるところには、それなりに人々をひきつける何かがあると思う。観光地でもある唐桑が意識するのはまず、これだ。観光客の誘致は、今後の観光施設の整備やイベントの充実を促進し、将来的には地元での職業を増やすことに繋がる。それは同時に、



若者をまちに残すことにもなり、進む高齢化に対処できるのではないかという考えもある。一度出て行った人たちにも帰ってきてもらえるようなまちづくりを目指していくべきだ。そのためには、唐桑町の良さや魅力を外部にアピールすることが重要となってくるのである。

### 地域内交流に繋がる

に関連してくるのだが、外に目を向けてまちづくりをしようとするとき、全面的に押し出すことになる観光地や特産物が出てくる。それは外部にたいするアピールにとどまらず、同時に町民へのアピールにもなり、町民同士の交流に結びつくと考えられる。例えば、宣伝されている特産品を用いて町民がイベントを企画したり、観光地をみんなできれいにしていこうという取り組みが起こったりする。自分たちのまちのことは、自分たちも紹介したい、自慢したいという思いを強くさせ、まち内部の結束をも強めることになる。

## 広報活動の例と友好都市との交流の現状

### [広報活動]

- ・ HP 作成（役場・商工会・観光振興協会・国民宿舎・漁業協同組合など）
- ・ 物産展への参加（単独で / 気仙沼市に便乗して）
- ・ 観光パンフレットの配布（遠隔地の駅などに設置）

### [友好都市との交流]

宮城県金成町（かなりちょう）（両町が合併協議中より、未締結状態）